

Strix 9: 63-70 (1990)

岩手県岩泉町櫃取におけるアリスイの営巣記録

藤井忠志¹

はじめに

アリスイ *Jynx torquilla* は、とぐろを巻いたヘビのように首をねじる独特の性質があり、種小名もその行動に由来する。茶褐色の目立たない色彩のキツキ科の鳥で、アリスイを多く食べる。アリスイ亜科には、ユーラシアの温帯域に分布するアリスイ、アフリカに分布するムネアカアリスイの2種のみがいる。くちばしが弱く、巣穴を自分で掘らずに樹洞を使うなどの点で、キツキ亜科やヒメキツキ亜科と異なるが、基本的な体の構造はキツキ亜科と同じである。

日本においては北海道で繁殖が認められてはいるが、本州で繁殖が確認されているのは青森県と岩手県の数例のみである。

岩手県においては資料1・2のごとく滝沢鳥獣保護センター内の巣箱で1970年から繁殖記録があるが、詳細は報告されていない。したがって本繁殖例は岩手県において2例目ということになる。もともとキツキ科とはいいながら、縦に静止することは少なく鳴き声もモズが弱気になったような声なので、興味・関心のある人しかその存在に気づかない面もあるだろう。

本種の生態の記録はこれまでも著しく少なく、今回の櫃取での記録が本種の生態の一端にでも迫ればと思ひここに報告する。

調査地と調査方法

調査地は岩泉町の最西端に位置し、ミズバショウ群落、シャクナゲ群落として県内では有名な櫃取湿原（標高930m）入口であり、岩泉町から盛岡方面へ向かう車の往来が頻繁な場所である。また平成2年度の県の土木事業の一環として道路拡張工事が行なわれており、いつ営巣木のシラカバが支障木として伐採されても不思議でない状況下にある。

この時期は櫃取湿原のミズバショウ群落を見物しに、家族連れや観光客がよくやって来る。湿原周辺の植生は、ブナ、ミズナラ、ヤチダモ、ハルニレ、オオヤマザクラ、ダケカンバ、シラカバが混生し、ヒメイチゲ、コミヤマカタバミ、ハクサンシャクナゲ、ミズギク、スマレ、ネコノメソウ、ベニバナイチヤクソウ、レンゲツツジ、ギョウジャニンニクなども見受けられた。しかし湿原一帯は、北上山系開発にともなう林間放牧地として和牛の放牧が行なわれており、乾燥化が危惧される。

野鳥は、カケス、ビンズイ、アオゲラ、アカゲラ、アオジ、ヒガラ、ゴジュウカラ、ミ

1990年10月20日受理

1. 〒027-05 岩手県下閉伊郡岩泉町上有芸

ソサザイ、カワガラス、ハリオアマツバメ、ハシボソガラス、サンコウチョウ、ホオジロ、アカモズ、クロツグミ、カッコウ、ツツドリ、コムドリ、カルガモ、ヤマドリなどが認められた。

またネズミ、モグラ、アナグマ、タヌキ、キツネ、カモシカ、あるいはツキノワグマの出没頻度の高い地でもある。

著者が本種をはじめ確認したのは、1990年5月13日4時55分に同行した瀬川強氏からの知らせであった。それ以来、数日おきの観察を単独で開始した。観察のさいには500m望遠レンズをつけたカメラを携帯し、撮影記録と双眼鏡による観察につとめた。また巣立ち前後にはビデオカメラによる撮影に専念し、巣立ちのシーンを記録できた。親鳥は観察者が巣から10m程度以上離れていれば、その存在をほとんど気にしない様子であった。

結 果

1. 営巣場所

表1に営巣木の特徴を示した。周辺では道路拡張工事や車の往来が激しく、決して本種にとって好ましい環境とはいえない。道路沿いにわずかに残されたやぶの中に、先端が折れたシラカバの半枯れ木に巣穴があり、穴の形状・サイズからアカゲラのかつての使用木と推定できた。巣穴は2個ありどちらも北東方向を向いていたが、本種が使用したのは上方の直径約6cmほどの穴であった。また巣穴の前方は開けていた。

2. 営巣経過

表2には、観察日時と繁殖・営巣活動の概要を示した。1990年5月13日、巣穴に出入りするつがいをはじめ観察した。5月20日、やはりつがいで13日と同じ巣穴に出入りするのを観察。5月28日は4時30分段階ですでに親1羽が巣穴に入っており、巣の使用を確認。6月2日6時54分、著者の車から流したアリスイのカセット音に対し反応し、巣内の1羽がしきりに鳴いた。その後巣穴入口に姿をみせ、再び巣内に入る。7時3分には他の1羽も入巣した。6月15日8時42分に入巣していた親が顔をのぞかせたが出巢せず、すでに本格的抱卵に入っているものと思われた。6月24日13時16分に巣内から1羽が出巢し、その後帰巣しないことから巣の放棄を危惧したが、17時16分に在巣している他の1羽を確認した。しかしながらこの日の親鳥はいつになく警戒し、周辺の伐採音に神経質になっている様子だった。6月29日15時30分に親が餌をはじめてくわえてき、入巣後巣内からはヒナの弱々しいシャーシャー音が複数聞こえたことから、ふ化日は6月28日・29日ごろと推定さ

表1. 営巣木の特徴。

Table 1. Characteristics of the nest tree.

樹種 Tree species	シラカバ半枯れ木 Dying <i>Betura</i> tree
胸高直径 Diameter at breast height	約36cm
樹高(先端は折れている) Tree height	約5m
巣穴の高さ(穴は2個あり上方を使用) Nest height	約4m
巣穴直径(ほぼ正円) Diameter of entrance	6cm
巣穴の方向 Direction of entrance	北東 Northeast

れた。また雌雄交互に給餌残巢するのは、ふ化後まもないヒナを抱くためと思われた。6月30日9時48分には巢内に雌雄ともに残巢せず、晴天のため暖かいからと思われた。7月3日にはヒナの声がはっきりし、5時41分～7時55分の161分間に雌雄で40回の給餌がなされ、これは約4分間に1度の割合であった(表5)。またこの日にはじめて親がフンをくわえて出巢するのを確認した。7月6日にはヒナが一段と成長しているのが、給餌のさいの声でわかった。ヒナの声の変化については表5に示した。7月8日9時36分にはコムクドリが営巣木横に現れ、給餌に飛来した親を追い払った。また雌雄同時飛来がこの日はじめて確認されたが、この後も5回ほど確認できた。意識しての同時飛来であることがお互いのクゥー音からうかがえた。7月12日にはヒナの声が約15m離れた道路まで聞こえるほどの大きさになっており、さらにヒナがはじめて巣口にみえ、親と変わらないほどの大きさになっていることが確認できた。また、雌雄ともに飛来しても給餌せず飛去していることから、巣立ち促し行動と思われる。さらにアカゲラの飛来時にヒナはじっと黙りこみ、防衛本能がみられた。7月14日は5時15分～6時15分までの1時間、まったく給餌行動が認められず(八代洋伸 私信)早朝に給餌活動が緩慢になってきていたこと、17時以降の給餌がほとんどないことより、本格的巣立ち促し行動がはじまったとみてよかろう。また巣口のヒナがこげ茶色の物を吐き出していることも確認でき、これは主食のアリの未消化部分と考えられる。親が6月30日給餌入巢後、巢内からくわえ出したものがペリットと判明した。ヒナのつつき行動初認。7月15日に給餌の都度、ヒナのつつき行動が激しくなり、巣立ちが間近と考えられる。また11時5分には1羽の親が給餌飛来したさい、すぐ近くをアオゲラが警戒音を発しながら飛翔するのに驚き、クゥーと鳴きながら急いで入巢するのを確認。7月16日5時24分ヒナ1羽が巣立ちした。7月17日には巣立ちが直接確認できなかったが、さまざまな状況から未明に1羽が、翌7月18日5時19分に1羽が巣立った(詳細は以下の巣立ちの状況の項参照)。

3. 巣立ちの状況

7月16日曇り。5時18分、巣木正面から親のいつもにない内にもったようなズー音が聞こえた。5時23分には親が飛来したが給餌せず、正面のシラカバ幼木に飛去。5時24分、1羽のヒナが巣穴から身を乗り出し巣立ち、親の待つシラカバ幼木へ。その後親子ともども飛去。巣の中からは別のヒナが顔を出し、まだ複数のヒナの声が聞こえることよりこの後も巣立ちが続くことを示唆していた。巣立ちが早朝に多いのは、前日午後からほとんど給餌がなく空腹状態にあるからだろう。この現象は本種に限らず、鳥類全般にいえることだろう。

7月17日大雨。5時～6時、営巣木真下に移動ししばらく様子をうかがうが、巣穴にはヒナの顔がなく巢内からも何も聞こえず。8時45分には大雨がやみ、8時58分にヒナ(前日の2羽目のヒナではない)が半分身を乗り出した。9時10分～10時36分まで雨が止んだりがあがりたりをくり返すが、親は一度も給餌にこなかった。10時36分にこの日初の給餌。11時48分にはずぶぬれで飛来し給餌。12時32分には雌雄が同時に飛来し前日同様のズー音(巣立ち促し音)を発したが、ヒナはそれにまったく反応せず。12時41分親は飛去した。12時46分、親が巣穴の正面約1m先に飛来。ヒナは顔を出し、その間親は樹間を行ったり来たりを2度ほどくり返す。13時7分、激しく雨が降る。この日はバケツをひっくりかえしたような激しい雨のため、再三の親の巣立ち促がしに対してヒナが反応できなかったも

表2. 繁殖・営巣活動の経過.

Table 2. Nesting histories.

月日 Date	観察時間 Observation time	天候 Weather	観察事項 Notes
5月13日	4:55-14:00	晴れ	初認. つがいが道路脇のシラカバの穴に出入り.
5月20日	4:30-5:20	曇り	つがいで13日確認の穴に出入り.
5月28日	3:50-5:06	晴れ	北方向から地鳴き. 巣穴内の親, 応答し顔出し. 他の1羽も後に入巢.
6月2日	6:54-7:03	小雨	著者のカーステレオのアリスイの再生音に反応し, 巢内でしきりに鳴く. 他の1羽も入巢.
6月4日	15:30-16:30	晴れ	抱卵中なのか, まったく姿をみせず, 地鳴きもせず.
6月15日	8:00-8:50	晴れ	親, 巢内から顔をのぞかせるが出巢せず.
6月16日	17:35	晴れ	静寂.
6月17日	15:05-16:00	曇り	親, 中から身を乗り出し顔出し. そのまま巢内へ.
6月24日	6:49-17:16	晴れ	親, 飛来. 著者の立ち上がった姿に驚き飛去. 巢内では他の親が抱卵中.
6月29日	15:18-17:03	曇り	ヒナへの給餌, 初認. 巢内から複数の弱々しいシャーシャー音.
6月30日	8:49-11:04	晴れ	雌雄とも入巢し給餌. ベリットくわえ出巢, 初認.
7月3日	5:14-7:55	霧雨	雌雄とも頻繁に給餌. 巢内からフンをくわえ出巢, 初認.
7月6日	14:52-18:14	小雨	雌雄とも入巢給餌するが, 徐々に入りにくそう.
7月8日	6:15-15:35	晴れ	雌雄とも給餌. 同時飛来を初認. コムクドリに追われる.
7月12日	17:11-17:44	霧	親, 巣口で給餌. 時々飛来しても給餌せず. ヒナが入口からみえるのを初認. 親とほとんど変わらない大きさ.
7月14日	5:15-18:41	雨-曇り-晴れ	5:15~6:16まで給餌活動なし. 巣口のヒナの舌出しおよびベリットを吐き出す行動を初認. 給餌のさい, 親へのつつき行動を初認. 親, すんなり体が入らず.
7月15日	7:02-14:03	小雨-大雨	給餌のさい, ヒナのつつき行動が激しくなる. ヒナ, しきりに巣口をつつく.
7月16日	4:26-6:14	曇り	1羽目のヒナが巣立ち. 2羽目のヒナは巣口に顔を出す.
7月17日	5:00-13:07	大雨	ヒナ, 巣口で半身を乗り出す. 親, ずぶぬれで給餌. 雌雄同時飛来. 3羽目巣立ち?
7月18日	5:00-6:20	曇り-晴れ	4羽目のヒナが巣立ち. 巢内にはまだ複数のヒナがいる. 観察終了.

表3. 繁殖・営巣活動の時期.

Table 3. Periods of breeding stages.

営巣木選定期	Finding nest trees	5.13~5.28
産卵準備期	Before egg laying	5.28~6.7
産卵期	Egg laying	6.7~6.15
抱卵期	Incubation	6.15~6.29
育雛期	Feeding	6.29~7.16
巣立ち期	Fledging	7.16~7.19

表4. 育雛期における出巢方向とその頻度.

Table 4. Flight directions from the nest.

方向 Direction	回数 No. of leaving	頻度 (%) Frequency (%)
北 N	13	10.0
北東 NE	57	43.8
北々東 NNE	28	21.5
北西 NW	1	0.8
南 S	8	6.2
南東 SE	6	4.6
南西 SW	5	3.8
東 E	11	8.5
西 W	1	0.8
計 Total	130	100.0

表5. 育雛期における平均給餌間隔とヒナの声の変化.

Table 5. Feeding interval and nestling's call.

月日 Date	観察時間 Observation time	給餌回数 No. of feeding	平均給餌間隔 Average feeding interval (s)	ヒナの声の状況 Nestling calls
6月29日	15:41-17:02	7回	520秒	弱々しいシャーシャー音 weak "shaa, shaa"
6月30日	8:49-11:03	11回	590秒	シャーシャー音 "shaa, shaa"
7月3日	5:18-7:55	38回	247秒	強いシャーシャー音 loud "shaa, shaa"
7月6日	14:52-18:14	19回	606秒	一段と強いシャーシャー音 louder "shaa, shaa"
7月8日	6:15-15:35	80回	420秒	激しいシャーシャー音 violent "shaa, shaa"
7月12日	17:05-17:44	12回	194秒	道路まで聞こえるキュリキュリ音 violent "kyuri, kyuri"
7月14日	11:19-16:52	69回	282秒	キュリキュリ音 "kyuri, kyuri"
7月15日	7:02-12:07	40回	258秒	ジリジリ音 "jiri, jiri"

のと思われる。また、巣穴から顔出したヒナは、前日観察した個体とは表情が異なることより、7月16日時点で2羽が巣立ちたと推定できる。

7月18日曇り-晴れ。5時16分ヒナ1羽がいきなり鳴き出し、地面から営巣木にしがみつきしきりに鳴いた。5時19分巣穴から顔をのぞかせていたヒナが巣立ち、巣穴正面のシラカバ幼木にとまった。巣立ちヒナ2羽が並び、しきりに鳴いた。地面から移動したヒナの羽毛は濡れており、このヒナに関しての巣立ちは確認していないことより、巣立ちした

表6. 出巢時にフンやペリットを運搬した回数.

Table 6. Number of leaving nest with feces or pellets.

月日 Date	出巢回数 No. of leaving nest	フンの運搬回数 No. of leaving with feces	ペリットの運搬回数 No. of leaving with pellets
6月30日	11回	0回	1回
7月3日	38回	4回	7回
7月6日	19回	7回	3回
7月8日	80回	16回	0回
7月12日	12回	1回	0回
7月14日	69回	21回	0回
7月15日	40回	2回	6回

のは前日一早朝と思われる。5時38分～6時20分、親が警戒してキッキキッキ鳴き、著者らの存在が巣立ちのじゃまになるようなので、本種についての一切の観察に終止符を打った。

著者が観察を終了した時点で巣立ちビナの総数は4羽に達しており、巣穴にはまだ複数のヒナが残巢していることより、予想される総巣立ち数は6羽以上である。

4. 給餌活動からみた食性

巣のヒナに給餌した食物のうちで最も多く観察されたのは、アリのさなぎであった。営巣木周辺は牧草地となっており、地面にはアカヤマアリの塚が多く、本種の主要な食物になっているものと思われる。その他ガガンボ、種不明の球果（地が白く表面が薄いピンク）、種不明の環形動物（ミミズのようなもの）をくちばしにくわえて給餌していたが、通常はアリの卵を飲みこんで吐き戻して給餌していた。

考察およびまとめ

本種の色彩から雌雄を識別しようと試みたが、その差異は一過性に過ぎずきわめてあいまいなので、本稿では触れないことにした。それゆえ夜間巣するのがどちらか、主に抱卵するのがどちらかは明らかではない。キツキ科では通常は雄であるが、山階（1941）は雌としている。ただ、抱卵および育雛は確実に雌雄交替で行なわれていることは確認できた。

育雛期における親の出巢方向を表4に示したが、北、北東、北々東の3方向が全体の75.3%を占めていたのは、営巣穴が北東を向いていることや、その方向に障害物が少ないこと、給餌用のアリを比較的楽に捕食しやすい場所があることなどが考えられる。

また、平均給餌間隔も育雛中期には徐々に短くなり、給餌回数も多くなっていることが表5よりうかがえるが、著者の観察時間帯が一定していないことや、観察間隔がそれぞれ異なっていることにより顕著な推移は不明である。

山階（1941）によると、両親はヒナのフンを片づけないから巣内はいたって不潔で臭いとあるが、著者の観察では育雛期の雌雄は頻繁に巣内のフンやペリット（アリの未消化物）をくわえて出巢していた（表6）。とくに育雛後期のフンを運搬する頻度は高かった。

本つがいの営巣・繁殖地は、前述したように観光地および岩手県土木事業所の平成2年

度の県道拡張地に含まれており、盛岡側・岩泉町両側から支障木撤去という名目で毎日チェーンソーの音が絶えない状況下にあった。著者および瀬川は伐採作業員にかけあい、本種の学術的重要性や絶対数の少なさを説き、説得了解を得た。さらに著者は岩泉町ふるさと創世にちなむ森づくりに関与していたため、観光協会、町土木課、県土木課に前述した事項を訴え、繁殖地の永久保存を教育委員会を通じてとりつけた。

ブルーメ（1986）によるとアリスイの個体群は生存がおびやかされており、近年イギリスからは完全に姿を消したという。その保護、保全にも今後大いに力を注がなければいけないだろう。次年度は当地において試験的にコムドリ用の巣箱なども設置し、本種の保護のあり方を模索、検討したい。

謝 辞

本種の当地においての初発見者・瀬川強氏、岩手県における本種に関する情報を収集していただいた日本野鳥の会宮古支部書記局長・高橋宏明氏、資料を提供していただいた泉祐一氏、本種の生息地保全のため骨を折っていただいた岩泉町土木課・土木事業所、本種の生態をご教示いただいた盛岡動物公園の渡辺尚氏、そして河北新報記者でありながら日夜張りこみ観察を補助いただいた八代洋伸氏の方々、最後に本稿執筆にあたりご助言いただいた樋口広芳氏には心より感謝の意を表したい。

引用文献

- D. ブルーメ. 1986. 動物大百科—鳥類2. 平凡社, 東京.
山階芳磨. 1941. 日本の鳥類と其生態第二巻. 岩波書店, 東京.

The breeding record of the Wryneck *Jynx torquilla* in Hittori Iwaizumi, Iwate

Tadashi Fujii¹

From May to July 1990, I observed one nest of Wryneck *Jynx torquilla* in Hittori Iwaizumi, Iwate. This is the second breeding record of the Wryneck in Iwate.

I estimated the hatching date was from June 28 to June 29. The pair used an old nest of Great Spotted Woodpeckers in a half dead white birch, and both sexes participated in the breeding activities. Ants were the main food for the young. Seven or eight young left their nest from July 16 to July 18.

1. Kamiugei Iwaizumi town, Simoheigun, Iwate 027-05

資料1 岩手県内におけるアリスイの記録（1990年5月23日現在）

1. 日本野鳥の会盛岡支部「野鳥通信」, 支部報「野鳥もりおか」
 - 1) 1980. 9. 3 外山高原, 2羽 (No. 1 1980. 10月号)
 - 2) 1981. 7. 25 御在所湿原, 幼鳥1羽 (No. 11 1981. 8月号)
 - 3) 1982. 4. 24 高松の池 (No. 20 1982. 5月号)
 - 4) 1985. 6. 6~8 滝沢村砂込, 1羽 (No. 58 1985. 7月号)

- 5) 1981. 春 盛岡市上田・岩手大学構内
- 6) 1987. 夏 葛巻町上外川（早春のころに声がよく聞かれた）.
2. 日本野鳥の会宮古支部，関川實私信
 - 1) 1970年代はじめごろ，滝沢村砂込の県鳥獣保護センターの巣箱で繁殖.
 - 2) 1973年ごろ，早坂高原で声と姿を確認した.
 - 3) 1978年6～7月中旬ごろ，盛岡市区界で声と姿を4～5回確認した.
 - 4) 1978年6月ごろ，宮古市重茂閉伊崎で姿をみた.
3. 日本野鳥の会盛岡支部，中村茂私信
 - 1) 1970年代はじめごろ，盛岡や渋民などで3～4回確認している.
 - 2) 1970年代はじめごろ，滝沢村の岩手大学演習林で確認した話を聞いている.

資料2 滝沢砂込県鳥獣保護センターにおけるアリスイの繁殖記録

（盛岡動物公園・渡辺尚氏より 1990. 7. 4）

1970年－1985・6年ごろまで滝沢砂込県鳥獣保護センター内で毎年確認した。繁殖期は6～7月ごろで，ここではコムクドリ用の巣箱を好んで使用した。

1970年 ムクドリの後に入り繁殖し，3羽巣立ち。

1971年 シジュウカラの巣箱をアカゲラが拡大し，コムクドリの後に入り繁殖。

1972年 前年の巣箱が古くなったので新しい巣箱に変えたら，底板が平らなため繁殖失敗。

1973年 前年の失敗があったので，底板を3cmほどに厚くし堀を入れたところ繁殖成功。しかし堀の位置も真ん中ではなく隅の部分好む。

1974年 2つがいセンター内で繁殖。

これ以降データはない。冬はまったくみかけないので，南方へ渡ると判断してよい。繁殖場所は電柱の巣箱で高さ3mの位置。餌は主にアリの卵らしい。毎年同じつがいここを訪れ繁殖した。環境さえ整えれば毎年繁殖する。